

はじめに

二十一世紀に入りすでに十年がたちますが、画一的な歴史観を背景とした歴史認識や一極集中の政治のありよう、また経済システムが大きく揺らぐ中で、私たちは現代の諸問題に直面しています。その諸問題の中には人間中心の考えや、一部の人びとによる極端なまでの利益追求などに見られる人間観が根底にあるように思えます。私たち宗門人は、現代の多くの人びとのさまざまな苦悩に応えて、釈尊の教えや宗祖親鸞聖人によって開かれた浄土真宗の教えの伝道に精励するとともに、同朋社会の実現をめざすことが早急な課題だといえます。

さて、一九六一（昭和三十六）年三月、親鸞聖人七百回大遠忌を記念として発刊された『本願寺史』第一巻（その後、第二・第三巻を逐次発刊）は、本願寺の歴史を叙述し、本願寺が歩んできた道を検証することで、将来の宗門の飛躍を期することを目的に、単に本願寺の歴史を通史として理解するためのものにとどまらず、研究書として大きな意義を有するものでありました。しかし、すでに約五十年がたち、親鸞聖人や本願寺についての研究はめざましく進展し、蓄積された研究論文は膨大な数となり、また、新史料の発見や紹介も多く報告されてきました。さらには、本願寺の歴史に対する新たな知見も出され、通史のなかにも新たに書き加えるべき事項が多く見つかっています。

このたび親鸞聖人七百五十回大遠忌を迎えるにあたり、今一度『本願寺史』に目を向けて、現在までの研究状況を反映させ、より充実した増補改訂を行い、二十一世紀における宗門のさらなる発展に寄与するため、本書を発刊することとなりました。殊に、現在宗門は、親鸞聖人七百五十回大遠忌宗門長期振興計画を推進し、その基本的な考え方を「新たな始まり〜明日の宗門基盤作り〜」として、様々な取り組みを進めておりますが、新たな計画を企画するうえで、今日までの本願寺の歩みを顧みるとともに、歴史の見地にたち推進しなければならぬことは申すまでもありません。そのことから本書に課せられた役割は非常に重要であるといえます。

私たちは、宗祖親鸞聖人を敬慕し、お念仏を慶び、御同朋御同行として立教の精神を共にする多くの先人のご苦勞よって今日を迎えています。本書を通し、親鸞聖人、さらには歴代宗主をはじめ、先人の方がたの弛みないご教導を仰ぐとともに、ご法義の繁盛と宗門興隆のため邁進いただくことを願ひいたしております。

最後に、このたび編纂の勞をとられた、本願寺史料研究所をはじめ、発刊にあたりご協力いただきました皆さまに対し、深く謝意を申しあげます。

二〇一〇（平成二十二）年三月

浄土真宗本願寺派 総長

橘

正

信

増補
改訂 本願寺史 第一卷

目次

第一章 宗祖親鸞聖人の生涯	一
一 誕生と出家	一
二 六角堂の夢告	二六
三 吉水時代	三三
四 念仏弾圧	五
五 妻と子供たち	六
六 越後から関東へ	六
七 関東での活動	七
八 門弟たち	一一
九 帰洛	二九
一〇 善鸞事件	四〇

一一	晩年の著作と書写	一五三
一二	最晩年と示寂	一七二
一三	宗祖に関する伝承	一九一
第二章	大谷廟堂の建立と推移	二二一
一	覚信尼と大谷廟堂	二二一
二	廟地の寄進と留守職	二三三
三	覚如宗主の前半生と廟地の拡張	二三三
四	大谷廟堂をめぐる争い	二四九
五	覚如宗主の留守職就任	二六三
第三章	本願寺の形成	二七五
一	大谷廟堂から本願寺へ	二七五
二	三代伝持の血脈説と如信宗主	二八四
三	覚如宗主と存覚	二九八
四	覚如宗主の晩年	三一九

第四章	初期本願寺の展開	三三七
一	晩年の存覚と従覚	三三七
二	善如宗主と緯如宗主	三五五
三	巧如宗主と北陸の寺々	三七三
四	存如宗主の教化活動	三八三
五	本願寺両堂の建立	四〇三
第五章	本願寺教団の成立	四二三
一	蓮如宗主の前半生	四二三
二	宗派の誕生と寛正の法難	四三三
三	吉崎下向と文明一向一揆	四三七
四	山科本願寺建立と他派の参入	四五三
五	長享一揆と宗主の晩年	四六三
第六章	戦国期教団の伸長	四八三
一	実如宗主の継職前後	四八三
二	証判御文章と永正三年の争乱	四八七

三	三法令と帖内御文章	四九四
四	大永一揆と東国・西国の教線	五〇五
	第七章 戦国期教団の構造	五七
一	享祿錯乱と畿内天文一揆	五二七
二	大坂本願寺と畿内寺内町	五二九
三	領国加賀と本願寺支配権	五三七
四	教団の結集形態と本願寺の諸役	五四六
五	戦国期の文化と芸能	五五九
	第八章 本願寺と織豊政権	五七一
一	顕如宗主の門跡成	五七一
二	三河一向一揆と加越鬪諍	五七八
三	石山合戦	五九一
四	信長との和睦と寺基移転	六一〇

第一章 宗祖親鸞聖人の生涯

一 誕生と出家

誕生 宗祖親鸞聖人は平安時代の末期、（じょうあん）承安三年（一一七三）に誕生した。これは、宗祖の著作や書写本の奥書に、宗祖みずからが記した日付や年齢から逆算して判明する。たとえば、真宗高田派本山専修寺（せんじゆじ）に所蔵される宗祖真蹟の『尊号真像銘文』（そんごうしんぞうめいもん）（広本）の奥書には「正嘉二歳戊午六月廿八日書之 愚禿親鸞（ぐとくしんらん）六（ろく）歳」とあり（『原典版聖典』七七五頁）、正嘉二年（一二五八）のとき宗祖は八十六歳であったことがわかる。

誕生日は未詳である。一般に前近代においては、今日の我々が意識する誕生日はあまり重要視されていなかった。数え年で年齢を数えれば、年が改まる元旦が重要であったからである。ところが江戸時代になって、四月一日が誕生日であるという説が生じた。その初見は、高田派の普門（ふもん）が著した『絵伝撮要』（宝永三年、一七〇六年刊）で、その上巻に次のように記されている（『真宗史料集成』第七卷）。

（コロホヒ）比人王八十代高倉院承安三癸巳年四月朔日ニ誕生シ給フ、（中略）爾ルニ此ノ誕生ノ日ノコト

ハ諸伝ニ不レ記、下野ノ縁記ト云フ書アリ、作者ハ順信房トアリ、此レハサダメテ二十四輩ノ随一ナリ、此ノ伝流布ハナハダマレナリ

ここに典拠として示された「下野ノ縁記」という書は現存せず、江戸時代に忽然と登場した説であることから信憑性は乏しい。しかし、この四月一日誕生説は、同じ高田派の良空が『親鸞聖人正統伝』（享保二年、一七二七年刊）に採用し、広く読まれたため、一般認識として定着するに至つたのである。

そして、明治六年（一八七三）に太陽暦が採用されたのに際し、本山では、承安三年四月一日がグレゴリオ暦では一一七三年五月二十一日に当ることを確認し、この日を宗祖の降誕日とした。他に高田派や木辺派などがこれを採用しているが、大谷派などは四月一日を宗祖の誕生日としている。時代の様相と末法思想 宗祖が誕生した時代はいわゆる院政期で、数百年続いた貴族政権が衰退し、やがて農民階級出身の武士が政権を掌握しようとする大きな流れの中にあつた。そして武士が台頭する過程で、保元の乱や平治の乱、源平の争乱がくり広げられるなど、戦乱が続いて社会的に不安な状況にあつた。

また、当時は農業技術も未発達で、気候の変動により大きな打撃を受けることがしばしばあつた。気候は、一一世紀は後半にかけて急激に温暖化が進み、その後、急激な気温の戻りがあつたと言われる。これによって、干ばつや凶作、飢饉が頻発した。続く一二世紀は、総体として温暖期であつたとされるが、温暖化に伴う夏期降水量の減少で水田耕作が大きく影響を受けることがあつた（西



京都市日野誕生院景観

谷地晴美「中世前期の温暖化と慢性的農業危機」、『民衆史研究』五五号、平成十年）。宗祖が誕生して間もなくの養和元年（一一八二）から二年にかけて大飢饉があったことは、よく知られている（『方丈記』）。

これらに加えて、すでに永承七年（一一五二）には「末法」の世に入ったとされていることも、当時の世相に深く影を落としていた。これは、釈尊の入滅後、その教えが次第に衰退していくという下降史観に基づくものである。「正法」の世では教（釈尊の教説）も行（正しい教えの実践）も証（その結果得られるさとり）もすべて備わっているが、次の「像法」（像は似ているという意味）の世になると、証がなくなり、さらに「末法」では教のみあつて行も証もない、という。

宗祖の生まれたころは末法到来とされた年からすでに一世紀あまりを経しており、末法思想は、上述のような社会の不安定な情勢とも相まって、現実的な意味合いを有するものとして広く一般に受け入れられるようになっていた。

誕生地 宗祖は一般に、京都郊外の日野の里で誕生したとされる。現在、法界寺の隣に日野誕生院が建てられている（京都市伏見区日野西大道町）。法界寺は日野氏の氏寺で、次に述べるように宗祖は日野氏の出身と考えられているが、